

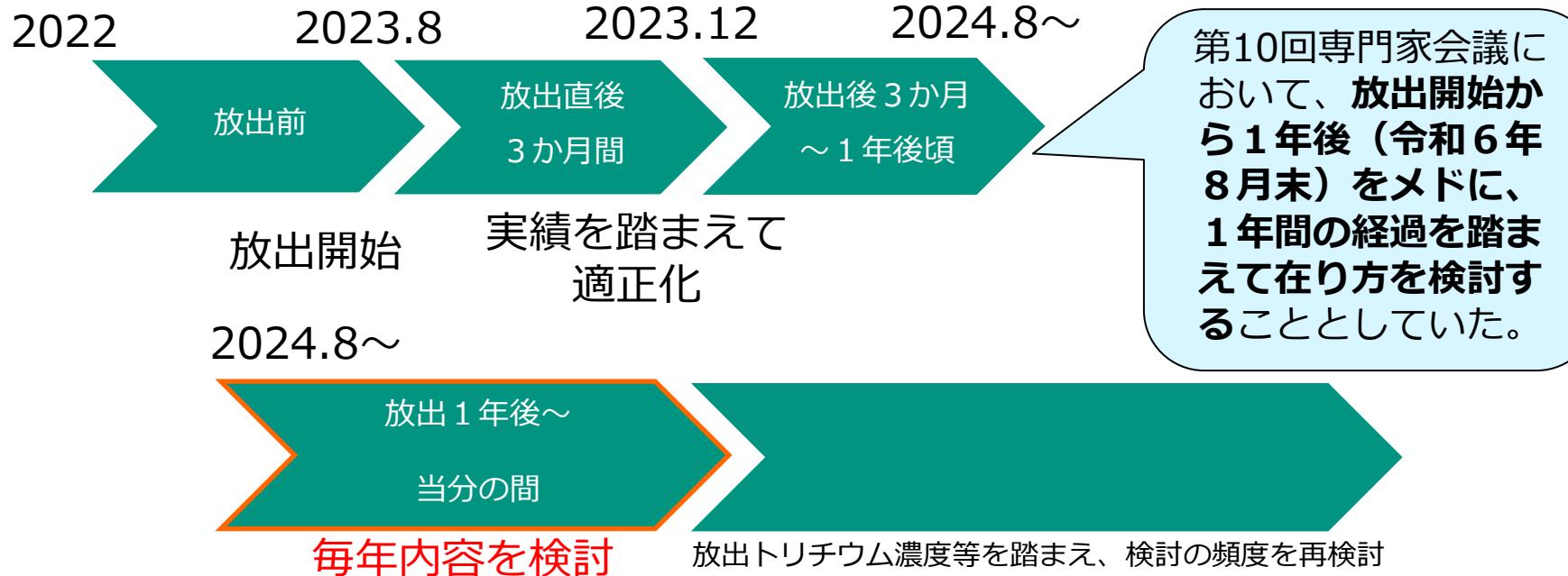


環境省の来年のモニタリングについて



モニタリングの在り方検討の進め方

引き続き客觀性・透明性・信頼性の高いモニタリングを徹底することを前提に、事業を**長期的に継続していくことを目指す。**



- 今後、当分の間は、毎年検討を行っていく。※不測の事態には柔軟に対応
→当分の間、毎年検討を行い、翌年のモニタリングに反映
- 放出トリチウム濃度が一定となる等、状況を踏まえ、検討の頻度についても再検討を行っていく。

モニタリングの在り方検討に関する視点

海域のトリチウム濃度の変動等を継続的に把握し、環境への影響に関する科学的な情報を公表することで、風評影響の抑制につなげることを目的に実施



来年のモニタリング（案） ※令和7年の中止から変更無し

試料	核種	測点	頻度	下限値
海水	迅速	トリチウム	3測点 (表層 + 1測点底層)	放出中2回 停止中月1回
			20測点 (表層)	放出中1回
		海水浴場6測点 (表層)	年2回	
	γ線核種	3測点 (表層)	放出中2回 停止中月1回	セシウム137: 1 Bq/L
	精密	トリチウム	29測点 (表層 + 9測点底層)	年4回 ※うち少なくとも1回は、原則として放出停止中に実施
		主要7核種	3測点 (表層)	年4回
		測定・評価 対象核種※2	3測点 (表層)	年1回
水生生物 (魚類)	トリチウム (FWT)	3測点	年4回	0.1 Bq/L
	トリチウム (OBT)	3測点	年4回	0.5 Bq/L
	炭素14	3測点	年4回	2 Bq/kg生
水生生物 (海藻類)	ヨウ素129	2測点	年2回	0.1 Bq/kg生

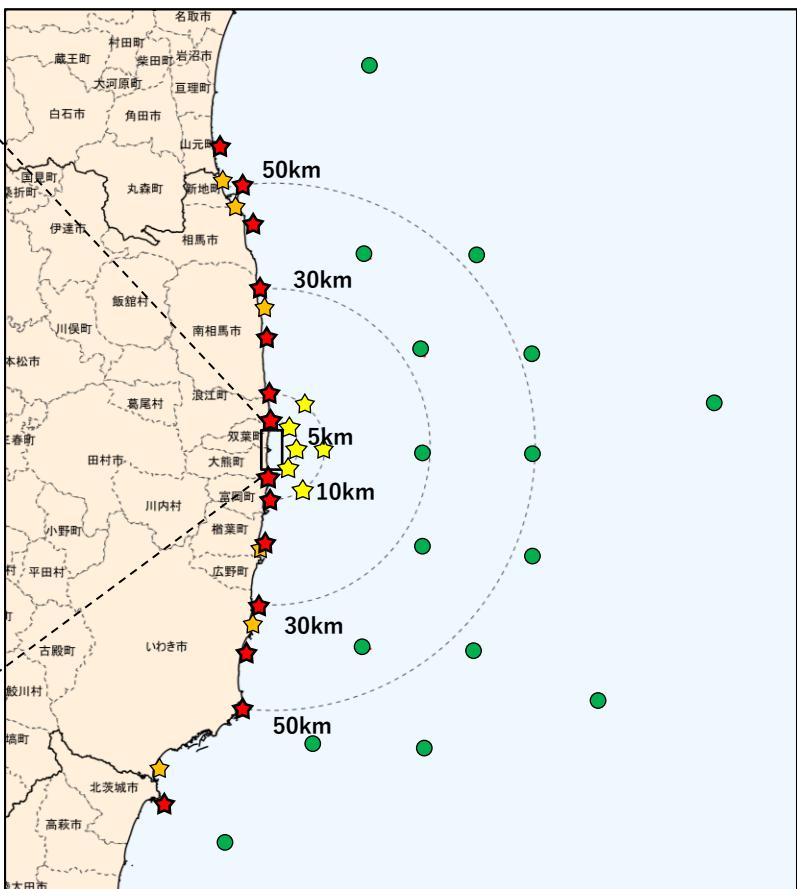
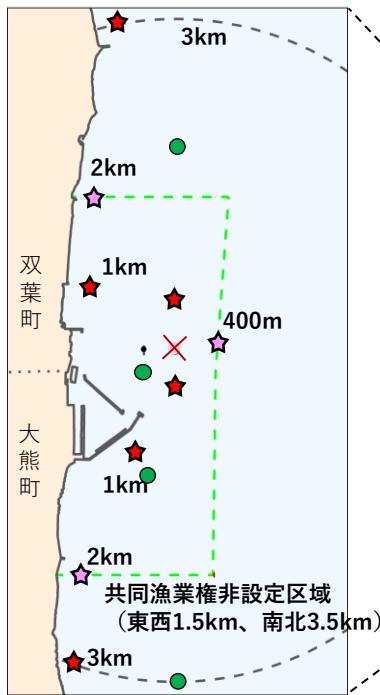
※不測の事態には柔軟に対応することとする。

※1：詳細は資料2-1別紙1を参照

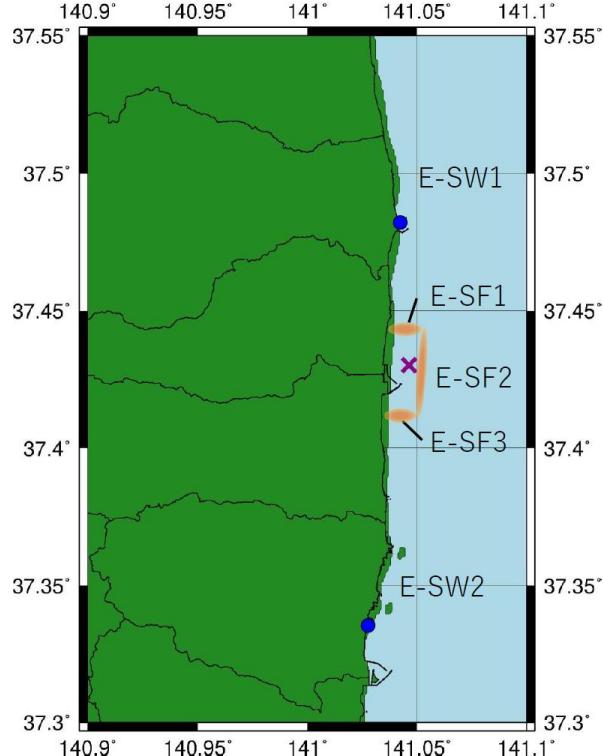
※2：核種存在比等から評価することとされている核種は、従前どおり除外

モニタリングの測定箇所

海水



水生生物



●：魚類の採取地点

●：海藻類の採取地点

★☆：環境省の測点（計35測点）

●：原子力規制委員会の測点（計20測点）

★：海水中のトリチウム（迅速及び精密分析）、その他の関連核種を測定（計3測点）

★：海水中のトリチウムを測定（迅速及び精密分析を実施、計20測点）

★：海水中のトリチウムを測定（精密分析を実施、計6測点）

★：海水浴場における海水中のトリチウムを測定（迅速及び精密測定を実施、計6測点）

(参考) 試料サンプリング現場の様子 (イメージ)

8月8日	1班	E-S15*	E-S10*	E-S3*		
	2班					
	3班					
8月20日	1班	E-S29	E-S27	E-S16	E-S15*	E-S10*
	2班	E-S17	E-S18	E-S33		E-S3*
	3班	E-S32				
8月21日	1班	E-S14	E-S13	E-S5	E-S4	E-S1
	2班	E-S34	E-S19		E-S22	E-S20
8月23日	1班	E-S35	E-S30	E-S38	E-S31	
	2班					

傭船計画・調整



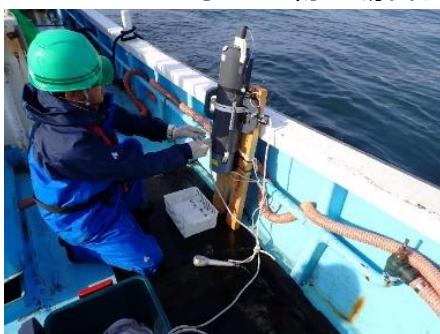
現地入り・安全ミーティング



出港・試料採取準備

1調査あたり、

調査船 (放出時11隻、四半期最大17隻)
+ 監視船 (放出時11隻、四半期最大14隻)
水生生物の場合、前日に刺し網を張る必要



試料採取 (最大3日/ 1調査)



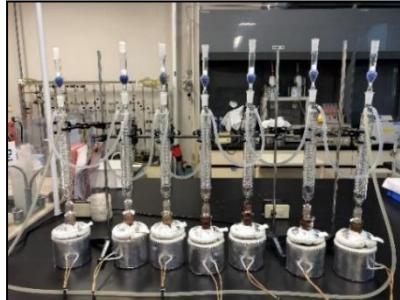
帰港・荷揚げ・試料固定・発送

トリチウム：全48L (迅速) 全116L (精密) 、主要7核種：全750L、その他54核種：全2520L

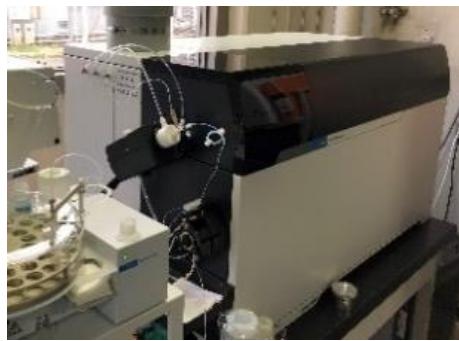
(参考) 試料分析現場の様子 (イメージ)



荷受け・情報登録



前処理



分析

α 線スペクトロメトリ：6台

液体シンチレーションカウンタ(JCAC分)：8台(アロカ社製)、2台(PerkinElmer社製)

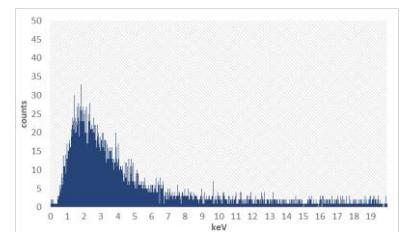
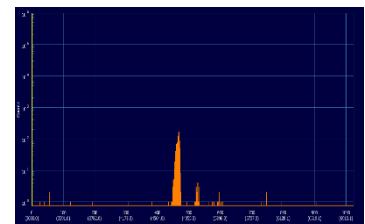
γ 線スペクトロメトリ：12台

ICP質量分析器：2台

試料採取から結果の公表までの時間

トリチウム：約10日（迅速）約2ヶ月（精密）、主要7核種：約2ヶ月、その他54核種：約4ヶ月

水生生物トリチウム：約3ヶ月、水生生物C-14：約4ヶ月、水生生物I-129：1.5ヶ月



データ解析・評価